幼稚園の自然観察環境について

松村義敏

五、特技者のこと

かようにして各種な自然観察環境をととのえることになると、これをだれが実際に管理するかということが必ず問題になって来る。またこれだけの全き環境を、充分に活用して、これをもって自然観察保育の効果をあげるようにするためには、特別このことを分担する特技者が必要となって来る。

特技者といえばすでにこれまで、言語指導、幼児音楽、絵画などで勝れた人が、この方面を担当して相当の成果をあげているようであるが、自然観察の方面ではこれまでそのような人を余り見受けない。

これは要するにそうした指導者が余り多くなかったこと、したがって保育者養成機関にそうした特色をもった学校がなかったことによると思われ、それは同時に女性としてこういう方面を担当することは、他の方面よりも不得意の人が多いということに起因していると考えられる。

しかし真面目に考えると、時代はもはやこれまでのしきたりで満足していられないところにまで来ている。しかも修業年限を二年とする短期大学保育科では、こうした特技者を養成することは無理であると考える。したがって、根本は、保育者養成機関の修業年限を三年乃至四年にすることが先決ではないであろうか。

しかし実際に当って養成機関の問題は具体的にかんたんに論じられないことと思うから、ここには省くが、要するに二年の課程終了後特技と、実習（インターンの如き）経験とのために、さらに一年乃至二年を重ねて、自然観察環境の運営と、自然観察保育を担当する特技者を養成する研究科課程を設置することが目下の急務と思う。

これを要するに、いかにゆたかな自然観

察環境が、そなわっても、常に幼児といっしょにいて、環境と、幼児との間をとりもつところの、保育者が、たえず自然界のうごきに目をつけて、幼児の行動を上手にあやつっていくのでなかったら、自然観察保育は死んでしまう。

環境育成と、保育特技者の養成とは、この意味において平行することが肝要であろう。そしてこれに成功することは、国策としての科学振興における永遠的発展の鍵であると思う。

六、樹蔭について

樹蔭をいかに造るかについては、まず既設の庭の状態、庭の広さ、地形などによって異り、一概には申上げられないが、大体全園庭のどの範囲を運動場に使い、どれだけを樹蔭用の茂みに使うかをまず定め、門から玄関、運道場の周辺、植込みその他を結ぶ歩道を、できるだけ便利に配置してから植樹の計画をたてることである。

この計画は、神宮外苑のような大規模なものでも、小公園でもさらに小さい幼稚園の庭でも、原理的には大して相違はなく、ただスケールが相違しているだけで、児童遊園も時に参考になる。

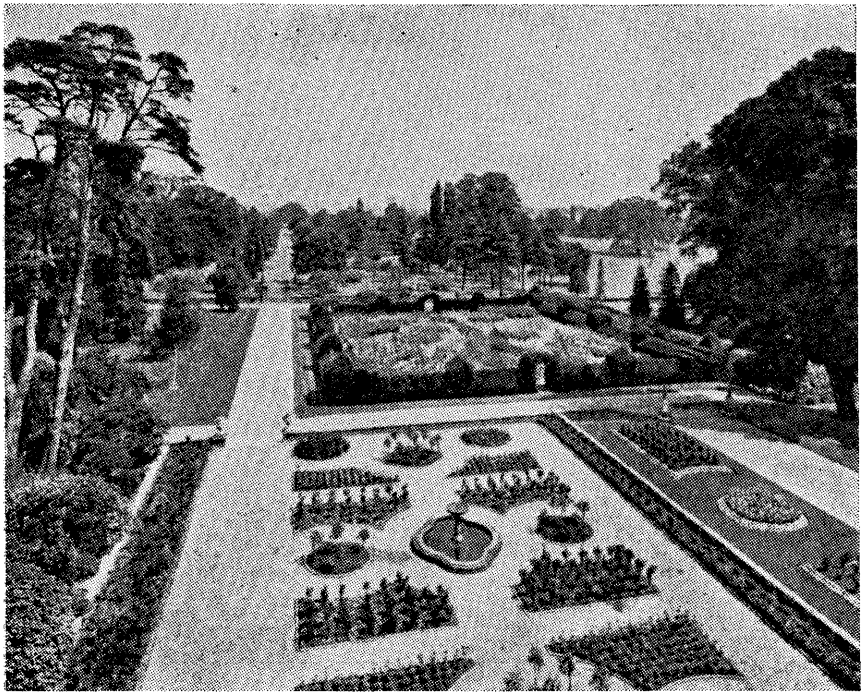
樹蔭といっても始めから大木を植えるというわけにはいくまいから、将来の現出図を胸に画いて植樹することが大切である。樹蔭となる植物は一般に喬木と呼ばれるもののうち、比較的大きいもので、いまその主なものをあげて見ると、常緑樹では、ヒマラヤスギ、アカマツ、クロマツ、ダイオウショウ、スギ、ヒノキ、ナギ、クスノキ、アラカシ、アカガシ、イチイガン、シイ、モッコク、ソヨゴ、ナナメノキ、タイサンボクのようなもので、落葉樹には、イチョウ、クヌギ、ナラ、クリ、ケヤキ、エノキ、モミジ類、サクラ類、ポプラ、アオギリなどが適当で、このうち常緑樹は各々の日当りを妨げないような程度に配した方がよい。

もちろん庭園には、樹蔭となるような大喬木の外に小喬木や、灌木類をも実際には植えるのが通例になっているのであるが、灌木類は主に、畑の周辺とか小道の両脇などに適当である。

七、花壇を作ろう

花壇は春からその持前の美を発揮するのであるから前年の秋から準備せねばならない。元来花壇は、野菜園のように無雑作に植えたのでは、切角の花の美が死んでしまうので、花の真価を発揮させるために工夫されたものである。花壇の形や大きさは、それぞれの幼稚園に応じて一定でないことはもちろんであるが、しかしいずれの場合でも、その形がくずされないために、その周囲を石か煉瓦かまたは、クリ石で囲むか、あるいは芝を細く植えるのが一般に行われている。

花壇の種類には、リボン花壇、境彩花壇、彩色花壇、毛壇花壇などがあって、一



第１図　毛壇花壇の一例
これを縮めるか、一部をとれば、どこにも作れる。

定していない。

a、毛壇花壇と彩色花壇、

毛壇花壇は、カーペットと呼ばれるもので、植込まれた花が、色彩模様になるように配置されたものである。日本では、この種の花壇が一般に見られ、新宿御苑、東大植物園、日比谷公園、天王寺公園、宝塚などには模範的なのか見られる。幼稚園でもスケールを小さくすれば比較的かんたんに作ることができる。

この場合必ずしも花の色のみによらず、観葉植物などをも手伝わせることがある。そして、この場合は、その植込植物の背丈は必ずしも一定していないが、一般に周辺に低いものを用い、中央に比較的高いものを用い、全体がシニメトリーの図形になるように設計する。

さらに、毛壇花壇の場合には、植込まれた植物と植物との間に、芝生や露地の空間を残すのが普通であるが、彩色花壇となると、地面全部が、隙間なく花卉でもって埋めつくされ、しかも色彩模様をあざやかに出すように植込まれる。したがって背丈が揃わねばならないし、密植するのが普通である。この場合配置の仕方によっては、その中に幼稚園にちなんだ文字が、浮出るよ

第2図　境彩花壇のよい例
右端より花菖蒲、おだまき、なでしこが見られる。

うにしたり、又人形や、時計の図形などが鮮明に出るように配置することもできる。

こういう彩色花壇に用いられるものとしては十糎内外の低いものには、アリッサム（白）、パンジー（黄または紫）、デジー（淡赤）、アルメリア（ピンク）、ロベリア（紫または青）、アギランサス（葉色種々）などがあり、今少し丈の高いものには、コレウス、ハゲイトウ、ベゴニアなどがある。またベゴニアのみでさまざまの色のものを用いて配色することもある。

b、リボン花壇と境彩花壇、

これは前者と少々趣きを異にし、その形も細長いリボン形をしているほか、植込む形式も同じ形のものを連鎖状に配置するのであってその色彩や模様を考慮する点では、毛壇花壇その他と同じであるが、リボン花壇は一般に直線の歩道の両側や、毛壇花壇の外廓などに配置される。ところが境彩花壇はとくに隣接する他所の土地との境界線とか、背後に森があるような場合、見通しのきかない所にたゞ不規則に、色の調和など余り深く考慮せずに植込むのであって、この場合には、前方ほど丈の低いもの

にし、後方ほど丈の高いものを植える。むろん、色の調和を考えないといっても、同じ時期と、同じ色のもののみ咲くようなことでは決して望ましい植方とはいえない。

さて、いよいよ花壇を作るということになると、まず日当りのよい排水のよい所を選び雑草を抜きその土地を深く耕し、石を除き、その底に、堆肥を充分に入れ、それと下肥または油粕汁のごとき液肥をほどこし、これに、砂を混ぜた土をかけて、平にならし、数日放置しておく、これがいわゆる「地ごしらえ」であって、素人が考えているように、いきなり植込むのでは駄目である。花の美を楽しまんとする者はまずその土を調製してかゝらねばよい成績をあげることはできない。それゆえ幼稚園では落葉を焼くようなことはさけるべきで、これを庭の片隅の目立たない所に堆肥とすること、雑草の場合も同様である。

植込む草花は大体、あらかじめ苗床に仕立てゝあったのを用いるので、秋植のものは九月頃から苗床をつくって蒔いておく。植込みに際して、その株間は植物の性能に応じて定める必要がある。このことは結局植付けた花卉が開花期になって適当に成長して、花壇の外貌が真価を発揮するようにというところがねらいである。そこで一般に、丈が十糎位のものであれば巾も一〇—十五センチよりは大きくならないから間隔もその程度でよい。

移植をきらうような植物は苗床仕立てはできないので直接花壇に播かねばならない。ケシや、ハナビシナウのようなものはその例であって、これはいきなり花壇に播いて成長に応じて間引きを行い所定の間隔に保つようにすればよい。

いまこゝに直径四米の六角形の毛壇花壇を作るとして、これに植物を植込むにはまず、中心より六角周辺の各稜に放射線をひき、この放射線すなわち円ならば半径を十等分し、この十等分点を結ぶ線をひけば、中心より十番目までの六角の同心線が得られる。そしてこの線上に植物を植付けるのであるが、この場合、

中　心　一本
第一線　六本
第二線　一二本
第三線　一八本
第四線　二四本
第五線　三〇本
第六線　三六本
第七線　四二本
第八線　四八本
第九線　五四本
第一〇線　六〇本

計、百五十一本で、この六角形の面には、一五一本の苗を用意すればよい計算になる。かようにして、株間さえ分れば、その花壇の広さに応じて本数を算出することができる。この花壇が六角形でなく円形であっても、このまゝあてはめることができる。

花壇にとって大切なことは、いつの場合

でも、中心に常緑の大の比較的高い植物を植え、かつ順次周辺に行くにしたがって低いものを用いるが、配植上の法則を次に示すと、

a、花壇の周辺は地面を完全に被包するように芝やクローバーを植えることが望ましい。

b、花壇の中心または之に準ずべきところに植える植物はひそかに植えること、これは遠くから見て、中心がはっきりするからである。

c、同一花壇に植える種類は、ほぼ同じ大きさのものを選ぶこと。

d、対角線上には同一の種類を選ぶこと。

最後に花壇の色の配色と植物の種類であるが、いま花壇の形を平面として、一定の間隔に同心円を画き、その線上に、漸次中央より外周に配色を考えると、

中心に黄あるいは藍それから順次白→赤→黄または青→緑の順が一つの範例として考えられる。これによると、黄はタンポポまたは黄花のサクラソウ、藍ならばヒアシンス、ムスカリ等など、白ならアリッサム、赤なら、サクラソウ、アルメリア、デージー、など、周辺の黄にはパンジーの黄、青にはロベリアの青を用いてその周辺は緑の芝ということとなる。

こうした順に考えると、形は円でも楕円でも、矩形でも、正方形でも、六角形でも全く同じ原理でいゝ。

また中心に赤をまたは黄を考えた場合、黄または赤のチュウリップをおいて、見ることもできる。

頌栄で目下春花壇として実施中のものは、中央に円形花壇をおいて、これに、海岸性のナミキソウ（紫）とハマギク（白）、キンギョソウ（赤）を配している。その円形花壇を中心に四方に四角な花壇があり、これにはそれぞれ中心に各色のチュウリップを配し、周辺に、ヴァイオレット（紫）とタカネナデシコ（ピンク）を配しているが、タカネナデシコは高山性のものにもかかわらず神戸は乾いているせいかよくできており、海岸性のハマギクも同様の条件でよくいっている。（筆者は頌栄短期大学）

*　*　*　*　*　*　*